

どしゃぶりに叩き付けられたる体再びシャワーに隈なく濡らす  
梶尾利徳

びしょ濡れで帰ってきてシャワーを浴びている、というだけの歌だが、そこはかとないユーモアが読めて、いい。濡れた体をさらに濡らす。「隈なく」が上手いのである。

新しく掛け直したる看板も「驛」と書きたる駅のこ  
だわり  
辻尾修

看板の表記に、あえて旧字体を使う駅。「掛け直したる看板も」の「も」が、とても可笑しい。駅員に凝った人物がいるのだらうなどと読者の想像は広がって、小さな物語を作り出し、そこはかとないユーモアの世界に導かれる。

梨が好きだったねと梨を渡されて梨が好きだった私  
を知りぬ  
熊田新子

結句の「私を知りぬ」は、「私と会いぬ」ぐらいの方がよかつただろう。おかげで、久々に柿好きの自分を自覚したのである。

位置少し高きに変へて巢を架ける蜘蛛一回り遅しさ  
増す  
水本光

昨日見たのと同じ蜘蛛だろうか。そうではないと思うが、友達のような蜘蛛がいて、毎日の農作業のときに気に掛けて見ているような、そんな親しみが読めて、そこが持ち味になっている。上句ののいねいな描写がポイントである。

## 短歌の現在

### No.378 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

御船様と呼ばれる岩よわたつみの男の夢の重さに  
反り  
屋良健一郎

一連中に「青方」という地名が出て来るので、五島列島らしいことがわかる。古くから漁民の信仰を集めた岩なのだろう。「男の夢」が強くひびきすぎるのが気になるが、珍しい素材を、ドキュメント・タッチで表現した取材感覚に注目。

目鼻口正しき位置に戻したりホームの先に知り合  
い  
細溝洋子

見られる自分を意識して、表情をぐっと引き締めたのである。意味はそんな意味だが「目鼻口正しき位置に戻したり」という表現が、それまで正しくない位置に散らばっていた目鼻口を想像させ、ユーモラスな味をかもし出すことになった。

ざくざくと刻みしニラの青臭さ悪意より手強し強引  
な善意は  
鈴木香代子

押しつけがましい善意に辟易した経験はたぶん誰にもあって、下句に共感する読者は多いだろう。上句は下句の比喩になっているわけで、ニラを刻む上句のイメージは迫力があって、いい。ただ、下句は分かり過ぎてしまう。もう少し、個的な、あるいは私的な意味を出した方がよかつたろう。

自動車の屋根を外して畳みこむ この生真面目さド  
イツつぽいぜ  
松岡秀明

あのイチローが乗っているというポルシェ・カレラを